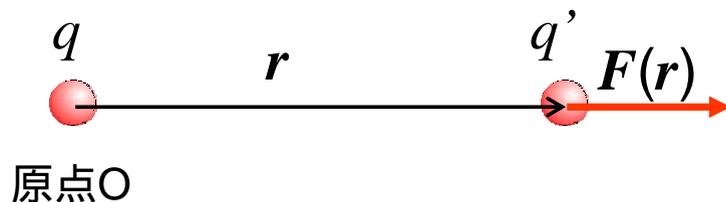


クーロンの法則の解釈



< 遠隔作用の考え方 >

電荷 q と q' との間に、クーロン力

$$F(\mathbf{r}) = \frac{1}{4\pi\epsilon_0} \frac{qq'}{r^2} \mathbf{e}_r$$

が**直接**働く(空間は変化しない)

< 近接作用の考え方 >

電荷 q によって、空間にベクトル場

$$E(\mathbf{r}) = \frac{1}{4\pi\epsilon_0} \frac{q}{r^2} \mathbf{e}_r$$

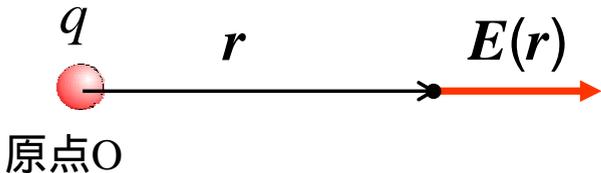
が作られる。位置 r に電荷 q' を置くと、この電荷は電場から

$$F(\mathbf{r}) = q' E(\mathbf{r}) = \frac{1}{4\pi\epsilon_0} \frac{qq'}{r^2} \mathbf{e}_r$$

が働く

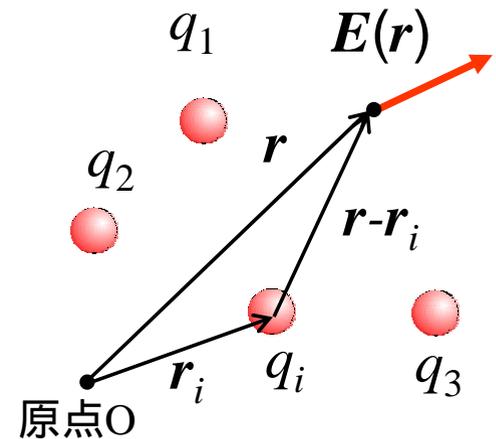
電荷の作る電場

原点Oに置かれた電荷 q が位置 r につくる電場は

$$E(\mathbf{r}) = \frac{1}{4\pi\epsilon_0} \frac{q}{r^2} \mathbf{e}_r$$


一般に、複数の電荷 q_1, q_2, \dots が位置 $\mathbf{r}_1, \mathbf{r}_2, \dots$ に存在しているとき、位置 \mathbf{r} における電場は、クーロン力の重ね合わせの原理より

$$E(\mathbf{r}) = \sum_i E_i(\mathbf{r}) = \frac{1}{4\pi\epsilon_0} \sum_i \frac{q_i}{|\mathbf{r} - \mathbf{r}_i|^2} \mathbf{e}_{\mathbf{r} - \mathbf{r}_i}$$

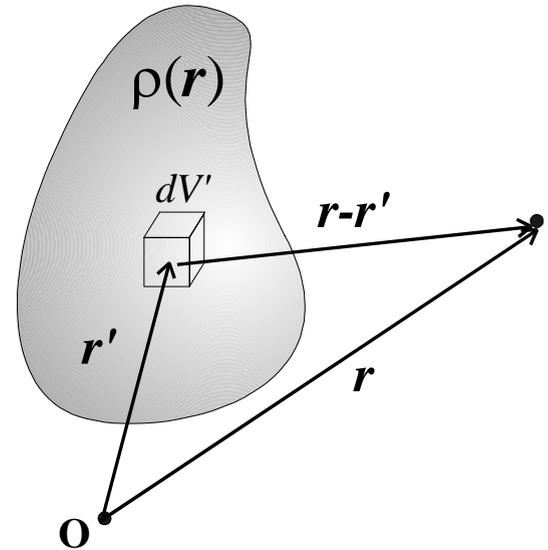


電荷分布の作る電場

電荷が連続的に分布しているとき、位置 r' の近傍の単位体積中に含まれる電荷の量を**電荷密度** $\rho(r)$ で表すことにすると、この電荷分布が作る電場は

$$\mathbf{E}(\mathbf{r}) = \frac{1}{4\pi\epsilon_0} \int \frac{\rho(\mathbf{r}')}{|\mathbf{r} - \mathbf{r}'|^2} \mathbf{e}_{\mathbf{r}-\mathbf{r}'} dV'$$

と表せる。

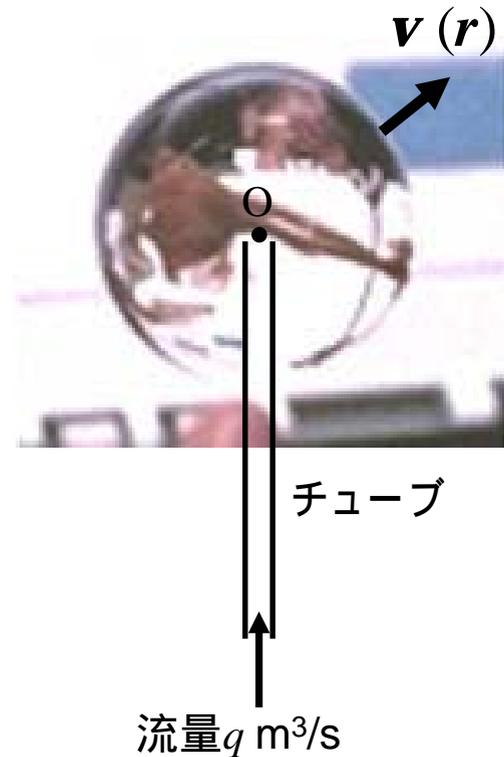


流体の速度場

原点 O から一定の割合 q [m^3/s]で縮まない流体が等方的に湧き出ているとする。このとき、位置 r における流体の速度場 $\mathbf{v}(r)$ [m/s]は

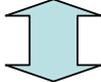
$$\mathbf{v}(\mathbf{r}) = \frac{1}{4\pi} \frac{q}{r^2} \mathbf{e}_r$$

と表せる。



速度場と電場のアナロジー

$$\text{電場: } \mathbf{E}(\mathbf{r}) = \frac{1}{4\pi\epsilon_0} \frac{q}{r^2} \mathbf{e}_r \Leftrightarrow \epsilon_0 \mathbf{E}(\mathbf{r}) = \frac{1}{4\pi} \frac{q}{r^2} \mathbf{e}_r$$

 数学的に等価

$$\text{速度場: } \mathbf{v}(\mathbf{r}) = \frac{1}{4\pi} \frac{q}{r^2} \mathbf{e}_r$$

原点Oに流量 q の湧き出しがある速度場 $\mathbf{v}(\mathbf{r})$ に関して成立つ数学的な性質は、
原点Oに電荷 q があるときの電場(に ϵ_0 をかけたもの)についても同様に成立つ。

面素を通る流体の流量

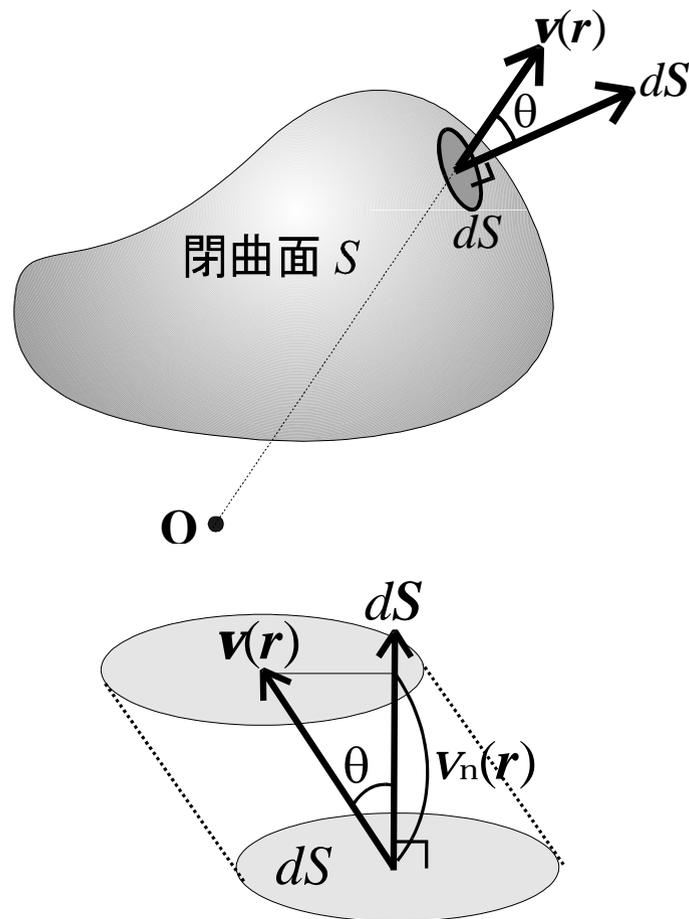
ある閉曲面 S 上の面素 dS を単位時間に
通る流体の流量 df は、

$$df = \mathbf{v}(\mathbf{r}) \cos \theta dS = v_n(\mathbf{r}) dS$$

面素の法線ベクトル(閉曲面から湧き出る
方向を正とする)と同じ向きで、大きさが dS
であるようなベクトル $d\mathbf{S}$ (**面素ベクトル**と呼
ばれる)を用いれば、

$$df = \mathbf{v}(\mathbf{r}) \cdot d\mathbf{S}$$

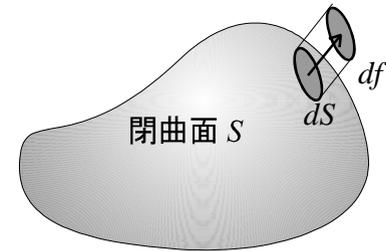
と簡単に表現できる。



閉曲面から湧き出る流量

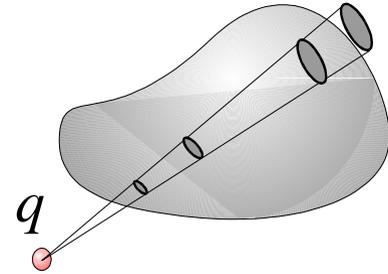
閉曲面 S を通過して流れ出る流量は、閉曲面 S 上の面素を通る流量の総和であるから、

$$f = \int_S df = \int_S \mathbf{v}(\mathbf{r}) \cdot d\mathbf{S}$$



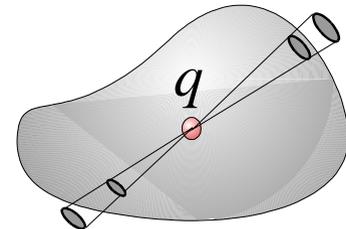
閉曲面 S の中に湧き出しが存在しないならば、

$$\int_S \mathbf{v}(\mathbf{r}) \cdot d\mathbf{S} = 0$$



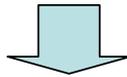
閉曲面 S の中に湧き出しが q が存在するならば、

$$\int_S \mathbf{v}(\mathbf{r}) \cdot d\mathbf{S} = q$$



ガウスの法則

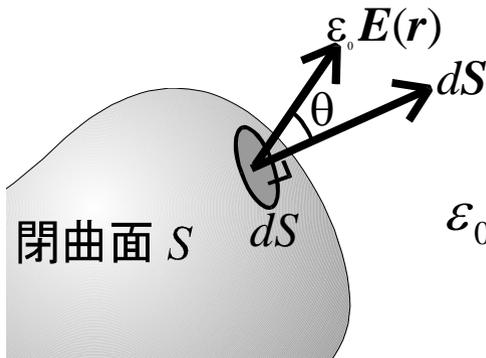
速度場 $\mathbf{v}(\mathbf{r})$ と電場 $\mathbf{E}(\mathbf{r})$ に真空の誘電率をかけた $\epsilon_0 \mathbf{E}(\mathbf{r})$ は数学的に等価



電荷が作る電場は

$$\epsilon_0 \int_S \mathbf{E}(\mathbf{r}) \cdot d\mathbf{S} = \begin{cases} 0 & \text{電荷 } q \text{ が閉曲面 } S \text{ の外部にある場合} \\ q & \text{電荷 } q \text{ が閉曲面 } S \text{ の内部にある場合} \end{cases}$$

を満たす。これを**ガウスの法則**と呼ぶ。



$\epsilon_0 \mathbf{E}(\mathbf{r}) \cdot d\mathbf{S}$ は**電束**と呼ばれる (流体のような実態はない)

一般的なガウスの法則

複数の電荷 q_1, q_2, \dots が存在するとき、

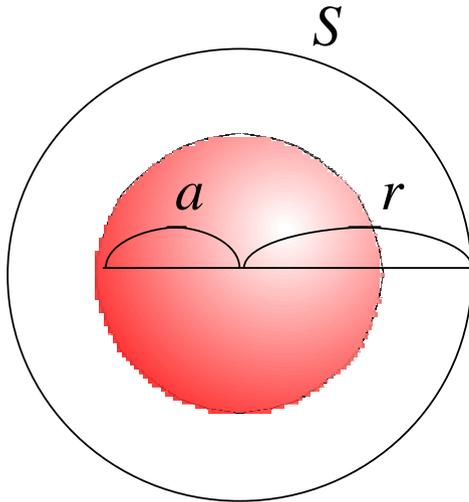
$$\epsilon_0 \int_S \mathbf{E}(\mathbf{r}) \cdot d\mathbf{S} = \sum_{S\text{内部}} q_i$$

電荷が電荷密度 $\rho(\mathbf{r})$ で連続的に分布している場合には

$$\epsilon_0 \int_S \mathbf{E}(\mathbf{r}) \cdot d\mathbf{S} = \int_V \rho(\mathbf{r}) dV$$

ガウスの法則の応用例

半径 a の球の表面上に電荷 Q が一様に帯電している場合の電場



対称性より、電場は $\mathbf{E}(\mathbf{r}) = E(r)\mathbf{e}_r$ と表せる

i) $r > a$ のとき

ガウスの法則より

$$\varepsilon_0 \int_S \mathbf{E}(\mathbf{r}) \cdot d\mathbf{S} = \int_V \rho(\mathbf{r}) dV$$

$$\text{左辺} = \varepsilon_0 \int_S E(r)\mathbf{e}_r \cdot d\mathbf{S} = \varepsilon_0 E(r) \int_S dS = 4\pi\varepsilon_0 r^2 E(r)$$

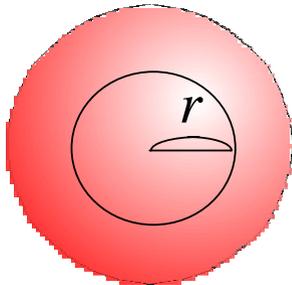
$$\text{右辺} = Q$$

$$\text{従って } 4\pi r^2 E(r) = Q$$

$$\text{故に } E(r) = \frac{1}{4\pi\varepsilon_0} \frac{Q}{r^2} \quad \mathbf{E}(\mathbf{r}) = \frac{1}{4\pi\varepsilon_0} \frac{q}{r^2} \mathbf{e}_r$$

ii) $0 < r < a$ のとき

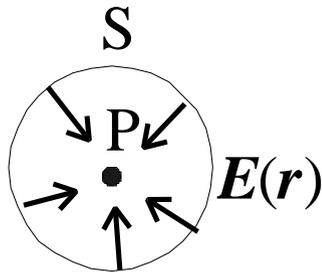
$$\text{同様に右辺} = 4\pi\varepsilon_0 r^2 E(r) \quad \text{右辺} = 0 \quad \text{より } E(r) = 0$$



ガウスの法則の応用例

自由空間に電荷の安定点は存在するか？

背理法を用いる



点Pが電荷(正電荷とする)安定点だとすると、この点Pの近傍の電場は点Pの方向を向いていなければならない。点Pを囲む微小な閉曲面Sを考えると、この閉曲面S上のどこでも電場は内向きなので、この閉曲面Sから湧き出る電束の和は必ず負になる。一方、この閉曲面S内の電荷の和は(自由空間を考えているので)当然ゼロである。したがって、これはガウスの法則と矛盾するので、電荷の安定点は存在し得ない。

(Earnshawの定理)

第1章レポート問題1

- (1) 無限に広い平面上に、面密度 σ で一様に電荷が分布している。このとき、この平面から距離 r の位置における電場の大きさ $E(r)$ をガウスの法則より求めよ。
- (2) 半径 a の球の内部に電荷 Q が一様に帯電している。このとき、球の中心から r の距離の位置における電場の大きさ $E(r)$ をガウスの法則より求め、その結果を横軸 r 、縦軸 $E(r)$ とするグラフに描け。